



特定非営利活動法人

# アジア・アフリカと共に歩む会

南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

## TAAAの活動日誌 2019年

- ・ 2019-12-18 [今年最後の梱包作業・忘年会・現地図書活動報告会](#)
- ・ 2019-11-02 [ドウエシューラ学区に移って2ヶ月経ちました](#)
- ・ 2019-09-28 [新規対象学区で図書活動が始まりました](#)
- ・ 2019-08-21 [本の梱包と「ぐりとぐら」民族語ラベル貼り（2019年8月18日）](#)
- ・ 2019-07-14 [ウガンダの子ども達に本を寄贈しました](#)
- ・ 2019-05-22 [JICA事業終了と農業塾のこれから](#)
- ・ 2019-03-09 [ルワンダでのキニヤルワンダ語訳「ぐりとぐらプロジェクト」](#)
- ・ 2019-02-09 [学び合いの場になってきた農業塾MOATS](#)

2019-12-18 日本

### 今年最後の梱包作業・忘年会・現地図書活動報告会



12月第3日曜の15日には、一時帰国中の現地プロジェクトマネージャーの平林薫さんに加わっていただき、年度末としては集まりがやや少なめの7人で、10時から12時まで、本の種分け・梱包とサッカーボールの空気抜きに取り組み、最終的に完成した梱包箱は20ほどになりました。お寄せ頂く本は、①就学前・小・中学校 ②高校 ③専門・大学 ④大人用（ペーパーバッグ中心） ⑤農業 ⑥スポーツ ⑦美術 ⑧宗教 ⑨辞書・百科事典 ⑩日本関係というような種類に分けて梱包しておりますが、②の高校生向けが圧倒的に多く、①の小学生用は、思わず「素敵！」と声を上げて読み始めてしまうものもたくさんあるのですが、絶対数が少ないという残念な実情を、今日も痛感させられました。

12時からは、恒例の鍋忘年会で、1960年代のヨーロッパ・日本・中国、参加者の学生時代、会話を通して想像のつく相手の経済状況、南ア航空のような大企業の倒産寸前の意味するところなどが話題になりました。



忘年会後は、平林さんからの現地プロジェクト報告を受けました。外務省のNGO連携無償資金協力事業で2013年から支援対象としてきたムタルメ/トウトン学区から同じウムズンベ州のドウエシューラ学区に移動して今年9月から始めた新規図書支援活動が3ヶ月余りを経て、対象12校（小7校、中・高5校）で順調に進んでいる様子が、映像を交えて報告されました。

援助対象高校の図書委員会での高校生時代の活躍を契機に、TAAAの図書プロジェクト・ファシリテーター役を担ってきたモンドリさんが、先行プロジェクトでの経験を生かして、新規12校での2月からの貸し出し開始を実現すべく、平林さんの右腕となって図書室整備と図書委員会活動の立ち上げに尽力している様子やこれまで平林さんが築いてきた地域の教育関係者とのつながりがあちこちで生きて、協力も得られている様子が伝わってきました。

その一方で図書司書の学位を持つのに実践の機会に恵まれて来なかった若者にも、モンドリさんのように司書学歴はなくても図書活動の実践を積んで実力のある若者にも、経済的に自立できる道を保障できないことに象徴される南アの現状は、日本の今の若者の置かれた厳しい状況にも繋がることを思わずにはいられませんでした。

ヨーロッパ系やインド系に互してやっていくためにはアフリカ系が身につける必要があると平林さんが強調していた「マネージメント力」とはなんぞやということも合わせて考えさせられました。最後にOrigami for Africaの木村香子さん創作の美しくかつ実用的なしおりが、今後南アの学校図書室にも紹介される予定であることが報告されました。

(大友深雪)

Page Top ▲

2019-11-2 南アフリカ

## ドウエシューラ学区に移って2ヶ月経ちました



Cophela小本棚設置



Malusi高で書籍の登録作業

これまで長く支援活動を行ってきたムタルメ地域を離れ、新しくドウエシューラ学区での図書事業が始まってちょうど2カ月となる。同学区での活動は初めてであるが、実は地域自体にはかなり

前から馴染みがあった。2010年に開始となったJICA学校菜園事業および図書事業の対象地域の一つであるブンガシエの学校を訪問する際に、いつもドウエシューラ学区内を通過していたのだ。当時はスタッフのマイケルさんと主に移動図書館車を利用して学校訪問をしており、道路沿いの学校の生徒たちが興味深そうに図書館車を見つめたり、手を振ったりしていたことが印象に残っている。マイケルさんとも“これらの学校を通り過ぎちゃって何か悪いね。サポートしてあげられたらいいのだけ”なんて話をしていた。特に道路に面した学校で大きな看板が出ている“Imbalencane Primary”は、caの発音がチャになり、前を通るたびに“インバレンチャネ”と発音練習をしていたことを覚えている。また、途中でJAPANという名の酒屋さんがあり、“何で酒屋がJAPANってつけたんだろうね”なんて笑っていた。今度こそは理由を聞いてみたいと思っている。

ムタルメ地域では最大42校への支援を行っていたが、今回は図書活動が全く初めて、もしくはある程度の設備はあるが活動が行われていない学校のため、対象校を12校とし、じっくりと時間をかけて活動を行っている。現在は図書室の設置もしくは改善に取り組んでいるところで、スペースのない4校へのコンテナ図書室設置も完了した（3校へは日本NGO連携無償資金協力より、1校へはひろしま祈りの石財団より寄贈）。対象地域ドウエシューラ学区長のザミサさんは、以前ムタルメ学区長だった際に協力して活動を行った間柄であり、“ぜひドウエシューラ学区への支援をお願いしたい”というリクエストを受けていた。今回ドウエシューラ学区での図書活動が決まったことを大変喜んでおり、校長を対象とした会議ではTAAAのムタルメ学区での事業の話や、新規図書活動への積極的な参加とサポートを各校長に強く呼びかけてくれた。万一、何らかの問題が見えてきたときには“ザミサさんに言っちゃうぞ〜”という切り札を持ったことになる。



Dweshula小にコンテナ図書室設置

対象校の一つMehlomnyama Primaryも道路沿いに看板が出ていて印象に残っていた。最初の訪問日に門を通ると、青々としたハウレン草やニンジン・タマネギが育っている学校菜園が目に入った。スタッフのモンドリと“この地域でもすでに畑作りをしている学校があるんだね”と話していたところに“いらっしゃ〜い”と出迎えてくれたのが、何とムタルメ地域のインプメレロ小で菜園担当してくれたムソミ先生だった。先生が“田舎の方”に転勤されたということは聞いていたが、まさか新規対象校の先生だったとはびっくり。新任地でも有機畑作りをしっかりと続けてくださっていて感激だった。ムソミ先生のお孫さんも同校に通っており、早速図書委員会メンバーに参加してくれた。そしてつい最近、対象校のMgamule高にコンテナ図書室を設置した際、学校のすぐ隣の家からムソミ先生が現れ、またまたびっくり。彼女の実家でお父さまが亡くなり、お葬式の準備をしているところだった。新規事業でムソミ先生と再会し、また一緒に活動ができることをとてもうれしく思っている。

ムタルメ地域で有機学校菜園事業を行っていた際、他地域への広がりをも目的とした活動として、今回の対象校であるUmalusi Primaryで有機農業研修を行ったことがあった。当時ファシリテーターであったシャリさんのお父さんが同校の教師で、ぜひ有機学校菜園を行いたいというリクエストを受けたのだった。その際に校長から“できれば図書活動の方も支援をお願いしたい”と言われていたのだが、なかなかリクエストに応えることができず、今回対象校として訪問したが、校長はすでに今年初めに退職されていた。シャリさんのお父さんは現役で教鞭をとっており（顔や姿が瓜二つ）、やはり畑作りや庭仕事が大好きで、シャリさんはきっとお父さんから影響を受けたのだと感じた。

これまでに活動を通して知り合った先生方からは多くを学ばせてもらい、たくさんの経験や思い

出ができた。新規事業もスタッフのモンドリと共に順調なスタートを切ったところで、今後、対象校の先生方や生徒たちとの活動や交流をととても楽しみにしている。

(プロジェクトマネージャー 平林薫)

2019-9-28 南アフリカ

## 新規対象学区で図書活動が始まりました



Nani高図書室設置予定教室と委員会メンバー



本の受け入れ登録をするDuduzile中生徒

TAAAは、6年間支援してきたムタルメ・トゥートン学区（クワズルーナタール州ウグ郡ウムズンベ自治区内）を去り、9月から近隣のドウエシューラ学区で新たに学校図書支援活動を始めました。

外務省NGO連携無償資金協力事業「ドウエシューラ学区の生徒の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得」として、同学区の小学校から高校までの12校を対象に、英語力向上を目指した学校図書支援活動とパソコン基礎技能指導（2年目に予定）を行っていきます。

ほとんどの学校に図書室がなく、本といえば教科書しかないという環境からのスタートとなりますが、ムタルメ・トゥートンでの経験を生かし、教師と生徒と一緒に楽しみながら活動していきたいと思っています。

スペースのある学校には空いている一室を使い、スペースのない学校にはコンテナを設置して図書室を作っていきますが、同時進行で、各校で8名の生徒と2名の司書教師からなる図書委員会を設立し、彼らが図書室の運営・管理、図書推進活動が出来るように指導していきます。図書委員会には図書室設置の段階から関わってもらい、生徒、教師、TAAAが力を合わせ、学び合いながら一から図書室を作り上げていきます。「自分たちが汗水たらして作った図書室！」という自負心が、その後の活動のエンジンやアクセルになっていく。ムタルメ・トゥートン学区での経験から学んだことです。



研修会でグループワークをする司書教師

すでに多くの学校で生徒と司書教師が選任されて図書委員会が出来上がり、司書教師対象の研修会も開催しました。司書教師といってもほとんどが英語教師で図書運営の経験はありません。この事業を通して司書教師になって行きます。研修会では、ELISTからのファシリテーターの説明の他に、TAAA図書指導員であるモンドリに“高校の図書委員会メンバーとしての経験とTAAAのプロジェクト担当としての経験”を伝えてもらいました。モンドリは、ムタルメ・トゥートン学区の元

TAAA対象校で図書委員会生徒として大活躍し、卒業後はTAAAスタッフとして多くの学校の図書委員会生徒たちを指導してきました。教師たちは、モンドリの話に興味を示し、耳を傾けていました。

図書委員会生徒たちも活動を開始しました。ドウドゥディレ中学校では、図書室の設置はこれからですが、それに先立ち、委員会生徒たちを中心に図書の登録作業を始めました。一日で300冊も登録したそうです。

TAAAのモットーは“プロジェクトリーダーは生徒たち”。主役である生徒たちを指導し、生徒を導く教師たちにアドバイスをし、一緒に考えながら彼らの頑張りを支えていくのがTAAAの仕事です。新規学区での図書支援活動は、いい感じでスタートしました。

(久我祐子)

Page Top ▲

2019-8-21 日本

### 本の梱包と「ぐりとぐら」民族語ラベル貼り (2019年8月18日)



毎日の猛暑にもめげず、11人のボランティアがさいたま市の作業場に集まりました。毎月第3日曜日の10時から12時までがTAAAの作業の日です。

前半と後半、二手に分かれて、絵本「ぐりとぐら」にズルー語訳のラベルを貼る仕事と英語の本やサッカーボールを梱包する仕事を交代で行ないました。梱包作業はエアコンのない作業場で行ないます。きょうは、SMBCグループから、ボランティアを希望された4人のかたが見えました。このうち、Aさんと小学生のお嬢さんとBさんは昨年8月にも参加されたリピーターのかたでした。CさんはSMBCグループから来られて今では、毎月、参加してくださっています。20キロ以上にもなる梱包された段ボールの重さを測り、高く積み上げるなどの力仕事を引き受けてくださる頼もしい存在です。

TAAAの中心のスタッフは20年～30年のベテランが多いのですが、最年少のスタッフDくんは小学生の時、お母さんと一緒に来られて、その後、中3で再度、スタッフとして作業に参加。高1の今夏、南アのスタディーツアでケープタウンのタウンシップを訪ねて来られました。

いま、作業場の半分は、うずたかく積まれた420個を超える段ボールでいっぱいです。これは9月には発送。10月位に南アフリカのTAAA事務所に到着の予定です。

(野田千香子)

Page Top ▲

## ウガンダの子ども達に本を寄贈しました

ウガンダ共和国にある「あしながウガンダ」の子ども達に、少しばかりですが英語の本を寄贈させていただきました。

現地代表の今村さんから子ども達の写真とご報告が届きましたので、ご紹介いたします。

### あしながウガンダレインボーハウス、TAAAからの英語図書寄贈について



あしながウガンダレインボーハウスは、2003年に、ウガンダの首都カンパラ郊外にあるナンサナ地域に開設されました。当時、ウガンダは世界に広く拡大したHIV/AIDSの影響を最も大きく受け、それが原因の1つともなり、多くの遺児を発生させました。

あしながウガンダレインボーハウスは、HIV/AIDSで親を亡くした子どもたちに対する心のケアを行う施設として開設され、その後、2008年には、経済的理由から小学校にも通えなくなった子どもたちに対する教育事業（Terakoya）を開始しました。現在は、理由を問わず、親を亡くした子ども達を対象としています。ウガンダでは、初等教育の授業料は無償ですが、学用品や給食代などの経費は各家庭負担です。したがって、親を亡くした子どもたちの中には経済的理由から就学できなくなる子が少なくありません。そうした子どもたちに公教育と同じ教育機会を提供し、修了後は、若干の奨学金とともに公教育に戻ってもらうことを目的として、Terakoya事業を実施、現在は、日本でいうところの年長クラスから3年生までの69名が勉強しています。

ウガンダでは、英語が公用語の1つとして定められていますが、家庭での言語は現地語であることが通常で、子どもたちは学校で始めて体系的に英語を習うこととなります。そのため英語の授業及び読書（Reading）クラスを設けていますが、教科書も1人1冊とはいかず、コピーで対応している他、副読本も圧倒的に不足しています。町中の本屋さんにも子ども向け図書はありますが、学習用に適した本となると種類も数も多くありません。

そこで、今回、会議での帰国時に、旧知のTAAA元代表である野田さんに、ご寄付の可能性をお伺いしたところ、代表の久我さんにもお話いただき、ご快諾をいただきました。

7月初めに持ち帰り、子どもたちに紹介、手渡したところ、大変な喜びようでした。授業での利用はもとより、読書という新しい習慣をつけてもらうべく、今後有効に活用していきたいと考えています。

改めて、皆様にお礼申し上げます。

あしながウガンダ現地代表  
今村嘉宏

2019-5-22 南アフリカ

## JICA事業終了と農業塾のこれから



JICA草の根技術協力事業“有機農業塾を拠点とした農村作り”は4月15日に無事完了した。現地でMOATS(Mthwalume Organic Agricultural Training Schoolの頭文字)と呼ばれている農業塾は、事業終了までにNPC(Non Profit Company非営利会社)に登録され、カウンターパートとして多大なサポートを下さった州環境省のザマ氏、指導員として活躍した地元在住のグメデ氏とジュワラ氏をメンバーに再スタートを切った。

コロコロ・トフェット地域の人たちへの有機農業研修、農業塾でのトレーニングコース、学校での有機菜園活動と生徒の家庭菜園作り促進を中心とした活動は、2年9ヶ月とそれほど長くはない期間の中で、地域の人たちに有機農業への関心を高めることができたのではないかと考える。地域の特に女性は農業に慣れ親しんでいる人もいることから、有機農業研修を受けるとすぐに活動に取り組むことができた。学校でも好き嫌いはあるものの、生徒はすんなりと活動に馴染んでいた。一番難しかったのはやはり若い人たちを対象としたトレーニングコースをいかに興味深いものにするか、卒業後に有機農業をしっかりと理解した上で畑作りを続けてもらえるか、という点だった。

事業開始前に有機農業の師であるリチャード・ヘイグ氏から“若者は流動的だから、落ち着いて畑作りをさせるのはなかなか難しいよ”と彼の経験からのアドバイスをもらった。確かに、トレーニング修了後すぐに証書を手にはダーバンや近くの町で就職活動を始めた卒業生も見られた。ただ、指導員の話では“トレーニングを修了したことが彼らにとって自信となり、次のステップに進む力になった”とのことだった。また、学んだ有機農業の知識と技術を彼らがいつか活用する日が来るかもしれない。

全卒業生の代表と言えるのが第3回コースを受講したコロコロ地域在住のシャボンガ・チリザ氏だ。トレーニングコースを受講した時、彼は自分の将来のキャリアを模索しているところで、仕事経験はあったようだが“自分でビジネスを立ち上げたい”という強い思いがあった。有機農業を学び、その有効性と可能性を十分に認識した上で農家としてスタートした。トフェット地域に関しては、出張トレーニングコースを修了した卒業生7名が協同組合を立ち上げ、有機作物栽培と養鶏を行っている。もちろん、農業で生計を立てることは容易ではないが、彼らは畑作りに情熱を持ち、“水を得た魚”のように生き生きとしている。



事業終了前に卒業生へのアンケート調査を行い、卒業生全112名中、83名から回答があった。83名のうち畑作りを継続している卒業生が59名、学業や仕事で現在は離れているが再開する予定と答えたのが23名だった。また、“有機農業について家族・友人・知人に話したり指導したりしたか”の質問には82名が“はい”と答え、その対象数は640名に達した。上記2つの質問に“いいえ”と答えた女性卒業生は、農業が自分には向いていないと感じたようだ。

また、“トレーニングコースの受講は前向きな影響をもたらしたか”という質問に82名が“はい”と答えた（上記卒業生も“はい”と答えていた）。何がよかったかを尋ねたところ、有機農業の知識や技術を得て畑作りができるようになった、という答えが最も多かったが、“質の良い”“栄養価の高い”“お金をかけず”“味がよい”などの言葉が見られたことは有機農業への理解を示すもので、“前向きな”成果と言える。また、“地域の人たちが励まされ、地域が開発された”“自分の育てた作物について自信を持って話ができるようになった”という回答があったことは喜ばしい。私自身が一番うれしかったのは“畑仕事が好きになった”というメッセージだった。1名“いいえ”と答えた卒業生は、“トレーニングコースだけでは十分に学べず、コース修了後、ファシリテーターのサポートなしで自分の力だけでは継続できない”と正直に答えていた。この卒業生に関しては、指導員でNPCメンバーとなったグメデ氏にフォローアップをお願いした。

最後に“将来の計画は”と尋ねたところ、43名が“有機農家として自立・畑作りと収穫物の販売”と答えた。また、10名が“有機農業を教える・次の世代に伝える”と答えた。とても頼もしく、これからは楽しみである。

小規模農業が定着しておらず、先例から学ぶことができない地域の若者にとって、トレーニングコースは将来に向けた様々な学び・経験となったと思う。また、州環境省と共に活動をしたことで環境保全にも意識が向けられたことや、伝統文化や作物への理解も深めたことは、この事業が技術指導だけでなく、地域の人たちの農業に対する意識の変革にも寄与したのではないかと考える。

(プロジェクトマネージャー 平林薫)

Page Top ▲

2019-3-9 ルワンダ

## ルワンダでのキニヤルワンダ語訳「ぐりとぐらプロジェクト」

ルワンダでJICAボランティアをされている園田さんから、「TAAAが絵本「ぐりとぐら」をズールー語に訳したラベルを余白に貼って、幼い子どもたちに読書の楽しさを知ってもらう活動を行っていることを知り、ルワンダでもキニヤルワンダ語のラベルを貼って読書に親しんでほしい」という趣旨のメールをいただきました。TAAAではさっそく、小包で英語版を1冊と日本語の「ぐりとぐら」数冊をルワンダに送りました。

園田さんからご報告を頂きましたのでご紹介いたします。

### <報告>

ルワンダ北西部ムサンゼ郡キモニセクターに、虐殺やDV、薬物依存やHIV等を含む暴力被害のトラウマ克服とコミュニティ再生に取り組むHealing and Rebuilding Our Communitiesという団体のオフィスがあります。今回「ぐりとぐら」の現地語訳に取り組んだのは、その一角にあるChildren's Peace Library Musanze。週末は大学に通いながら、平日は図書館司書としてこの団体で働くルワンダ人青年クウィゼラ・ジェレミー君

と一緒に翻訳をしてくれました。

日本語と英語の絵本両方を使って内容の細かい説明をしながら、適切なキニヤルワンダ語に訳します。中にはルワンダでは馴染みのない食べ物や単語も登場するため、ルワンダの子ども達の身近なものに置き換えたりもしました。印刷したキニヤルワンダ語訳を、ご寄付いただいた「ぐりとぐら」の原本に貼り付け、完成。英以前まで蔵書は英語ばかりだったため、ほとんどの子ども達は絵本の挿絵を見て楽しむだけでしたが、現在は自分たちの母国語で絵本のストーリーを楽しめるようになりました。

「ぐりとぐら」の翻訳を機に、もともと図書館にあった英語の「はらぺこあおむし」の絵本も2人でキニヤルワンダ語に翻訳しました。今後もこうして少しずつ現地語の蔵書を増やしていきたいねと話しています。



### <背景と御礼>

今回、貴会が「ぐりとぐらプロジェクト」を南アフリカにてズールー語で実施していることを知り、単一言語国家であるルワンダでも同様のプロジェクトを実施したいと申し出させていただきました。貴会のご厚意でご快諾いただき、上述のような活動を行なっています。

ルワンダでは読書が習慣として根付いておらず、本を読む楽しみを知らない子どもがほとんどです。そんな中、数少ない図書館での蔵書はほとんどが寄付された英語の本。十分に内容を理解できない上に読書文化がない子ども達にとって、本を読みたくなる環境と言えるものではありませんでした。英語教育のために英語の本を読むことも大切ですが、まず本を読む楽しみを知ってもらうためには、キニヤルワンダ語の絵本は必要不可欠と思います、貴会に申し出た次第です。

事務局長の野田千香子様をはじめ、代表の久我様、お取り次ぎいただきました浅見様並びに「アジア・アフリカと共に歩む会」ご関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

2019年2月

JICAボランティア（2017年度2次隊・ルワンダ・青少年活動）

園田 理沙

（事務局 野田千香子）

## 学び合いの場になってきた農業塾MOATS

2016年7月に始まったJICA草の根技術協力事業「有機農業塾を拠点とした農村作り」は、いよいよ4月15日に終了します。これまでに、山間部の出張トレーニングコース生を含めて112名の卒業生を出し、その他にも多くの地域住民を指導してきました。

また、MOATSで育てている苗や鶏卵を購入する近隣住民が増えてきており、現在は月平均100名の地域住民がMOATSを訪問するようになりました。



昨年9月からは、新たに生徒を募集せずに、上級コースを設けて今までの卒業生の再トレーニングに励んでいます。上級コースでは、採種方法の再指導など直接有機栽培に関する内容だけでなく、瓶詰めや食品乾燥などの食品加工技術、養鶏、フェンス作り講習など幅広く行っています。フェンス作りの達人といわれる地域住民を指導者として招き、伝統技術に詳しくない若い卒業生たちに、地域に自生している竹を使った地元の技を指導してもらいました。「身近なものを有効利用しコストをかけない野菜作り」という有機農業のコンセプトを地元のフェンス作りの技の中で再確認した講習会でもありました。

達人の畑のフェンスは、それは素晴らしい模様を成していて、防御だけでなく装飾の機能も持たせているそうです。



収穫物を利用した調理研修会も開催し、栄養を逃がさず化学調味料使用を控える調理方を紹介しました。卒業生たちは伝統食のレシピ交換を行っていました。

農業塾では、スタッフたちが、トレーニング生や地域住民に技術を指導し知識を教えてきましたが、指導が一方通行で終わるのではなく、ここに来て、卒業生や住民が伝統の技や経験を教え合う“学び合う場”に成長してきています。学び合いには、スタッフたちも参加し、彼らも住民や卒業生から、販売先や地域の伝統食や技な



ど、自分たちが知らなかったことを学んでいます。

事業終了後、MOATSが有機農業の中心地となり、卒業生を中心に地域住民が集って、経験、知識、情報の交換をしたり、地元の伝統や技を再確認したり、新しい知識や知恵と結びつけて応用したりと“学び合いの場”として発展していくととても面白いと思います。

MOATSが、地域内でそのようなユニークな場として機能して行ってほしいと願っていますし、大きな可能性を感じています。

(久我)